

被災地に鯉のぼりたなびく

上越市議 橋爪法一

東日本大震災から2カ月が経ちました。被災地へ支援物資を届けるとともに災害対策を学ぶために、私は上野公悦市議など3人の仲間とともに、5月16日から3日間、岩手県に行ってきました。訪ねた主なところは釜石市、大槌町、山田町、宮古市、大船渡市、陸前高田市です。その際に見たこと、聞いたこと、感じたことを綴ってみました。

2か月過ぎてもガレキの山

釜石は鉄とラグビーのまち。新日鉄の大きな釜石工場の脇を通り過ぎてからすぐでした。街中の様子が一変しました。建物がズタズタにひきちぎられています。あちこちに車が転がっています。まるで鉄パイプで袋叩きにあったように滅茶苦茶に壊されています。商店のシャッターはちぎれ、その奥には、なんということでしょう、ありとあらゆるゴミが津波によって叩き込まれていたのです。片付いているのは、メイン道路と歩道ぐらいなもの。家の中も、細い路地も、みんなガレキの山となっていました。電気が復旧したのはまだ一部だけです。「これじゃ、ゴーストタウンだね」と車中で誰かがつぶやきました。



水に攻められ、火に攻められて

車の中から海が見えたのは、釜石市街から北上し、鳥谷坂トンネルを抜けてまもなくでした。両石湾です。久々に見る太平洋の海、おだやかで、ほんとうにきれいな青い海でした。2か月前、ここで大惨事が起きたとはとても信じられませんでした。

しかし、何分も経たないうちに、生まれて初めて見る光景が目に入ってきました。防潮堤を乗り越えてきた津波が、川をさかのぼり、片っ端から住宅を呑み、押しつぶし、もんで、バラバラにしてしまった、そのあとです。津波は杉

林の中まで駆け上がり、鉄くずや木材などを置いて行きました。大量のゴミの中で赤茶色をしているのは錆びた鉄。鉄骨造りの建物は鉄の柱だけが残し、建材が破れた布切れのようにぶら下がっていました。分厚い防潮堤そのものも、倒され、割れて無残な姿となっています。

大槌湾が見えるところまで行くと、被害はさらにひどくなりました。まちがそっくりやられてしまっています。湾の端から端までずっと平らになり、残ったのは高層ビル、鉄骨造りの建物の柱、それと小高いところにある木造の民家だけです。それも数えるほどしかありません。津波にやられたところとやられなかったところははっきりと区別できます。

大槌湾では、市街地の山際の林の木が赤茶色になっています。これは火事で焼けたあとです。地震と津波に襲われる中で、市街地などで火事が発生しました。火は近くの山だけでなく、かなり離れたところの山まで飛び、あちこちで山火が発生していたことがわかります。標高200メートルほどの山がいたるところで赤茶色になっているのには驚きました。これはテレビでもあまり放映されておらず、現地に入って初めて知りました。被災した人は津波に攻められ、火にも攻められたのです。

屋根をはぎ取られた赤い消防車

大槌町の中心部を視察した際、被災した役場庁舎を訪ねました。津波が襲ってきた時間なのでしょうか、正面玄関の上の壁にある丸い時計は午後3時半で止まっていました。時計のあるところの高さは2階の天井くらいですので、そこまで水が上がったのでしょうか。屋上の防災アンテナは無傷で、町旗などの掲揚塔はまっすぐ立っています。役場建物の窓ガラスは1階だけでなく2階も、それこそひとつもありませんでした。役場前から後ろが見通せる状態です。



この役場庁舎には、地震や津波から町民の命を守るために最後まで頑張っていた職員たちがいました。津波が来た時、屋上まで逃げることができたのは約20人、あと数十人の職員は津波に吞まれてしまったのです。正面玄関前から建物の中を見た時、このことを思い出し、胸が熱くなりました。玄関脇には、花束とジュースなどが置いてありました。たくさんの人たちがここへ来て、殉職した人たちのことを思い、手を合わせたの

だと思います。私も上野議員も合掌しました。

正面玄関から30メートルほど離れたところには屋根をはぎ取られた赤い消防車がありました。車のフレームはグニャグニャになり、はぎ取られた部分にはホースや鉄くずなどがどっさりと入っています。すべて津波の仕業です。どこが運転席だかわからないほどになっていました。この消防車、近くの大槌消防署のもので、役場前にはいま、一本の針葉樹が残っています。高さは3メートルほどです。塩水に浸かり、一部の葉は赤くなっていますが、半分くらいは緑色の葉をつけていました。

公務員のみなさんは、町役場職員であろうと、消防職員であろうと、津波がやってくるぎりぎりまで、住民の命を守るために頑張りました。赤い消防車や役場前の木はその象徴だと思いました。

鯉のぼりは復興への決意

国道45号線をさらに進み、トンネルを抜けるとまもなく「吉里吉里小学校」と書かれた標識が目に入りました。井上ひさしの小説、『吉里吉里人』に出てくる、あの「吉里吉里」です。

道は下り坂、前方には港が見えます。「ここから津波浸水想定区域」という青い文字で書かれた大きな案内標識のそばを通り過ぎると、道の両側から奥まで家々はことごとく破壊されています。両石湾、大槌湾に面したところで何か所もこうした惨憺たる光景を目にしてきたのですが、ここも同じでした。残っていたのは赤と白のペンキが塗られた四角い建物ひとつだけでした。おそらく、ここはガソリンスタンドだったのでしょう。

その建物のそばを過ぎると、左前方に真新しい木の柱で組み立てられた建物の姿が見えてきました。まだ、建前を済ませたばかりの平屋建ても建物です。「地震や津波に負けないで、ここで頑張るぞ!」という所有者の気持ちがびんびん伝わってきます。うれしくなりましたね。3日間の岩手入りのなかで、こうした新築の風景は仮設住宅以外ではここしかありませんでした。

私たちが訪ねたまちでは、いうまでもなく、復旧、復興に向けた取組が始まっています。ガレキの撤去、電柱を立て電気を引く工事、整地作業などを目にしました。地震から2カ月、巨大地震と津波に襲われたダメージは大きく、復旧・復興のスピードは必ずしも速くはありません。

そうしたなかで山田町庁舎を訪れた時、感動したのは、鯉のぼりです。五月晴れの中、役場庁舎と隣の建物の間をつなぐようにしてロープが張られ、赤や青の鯉、10数匹が泳いでいたのです。役場は少し高台にあり、後ろには新緑でいっぱい山がひかえています。鯉のぼりの色彩豊かな姿と山の新緑がとて

もマッチしていました。

空に泳ぐ鯉のぼりを見て思い浮かべたのは元気な子どもたちの姿、明るく、伸び伸びと育つ子どもたちの姿です。鯉のぼりを大空に泳がせる、この取組のなかに、私は、大震災に負けないで子どもたちを育て、まちを発展させていくという大人たちの決意を感じました。鯉のぼりは、無料青空市をやった大槌町桜木町の避難所兼ボランティアセンターとなっている桜木町保健福祉会館前広場でも見かけました。



無料青空市を手伝ってくれた二人の青年

私たちが今回、釜石市などを訪問した目的のひとつは支援物資を被災されたみなさんのところに届けることでした。日本共産党東部地区委員会の深沢寿郎委員長と事前に相談し、17日午前10時から大槌町桜木町で「無料青空市」を開催することになりました。

16日の午後、桜木町保健福祉会館前で案内ビラを配布していると、「他の人にもあげるので、もう1枚下さい」「明日はどんな方向に並べばいいんですか」などの声が次々と寄せられました。関心は高かったですね。

さて、当日の朝。私たちは青空市の会場として案内した桜木町の西大通りに午前9時前に入りました。物資を運び入れるにあたっては、東部地区委員会所属のSさん、Fさんから軽トラを出してもらいました。2人には、それだけでなく、会場での準備も支援物資渡しなども手伝ってもらいました。2人ともよくやってくさいましたが、そのうちFさんはまだ20代の青年です。テキパキと、元気に仕事をやってくれるのでとても好感が持てました。

午前9時。私たちがブルーシートを道路脇に敷いていると、一人の青年がやってきました。トレーニングパンツを履き、大きな白いバックを持っていたこの青年は、会場づくりや支援物資並べなどを手伝ってくれました。彼の手伝う姿は自然で、最初、私たちを手伝う現地スタッフの一員かと勘違いするほどでした。準備が終わると、彼は支援物資のすぐそばのトラックの脇に立ち、順番待ちの列の先頭に立ちました。



青空市の開始前、私たちは、物資の受け取りにあたってはゆっくりと歩いてほしいこと、コメとソバと味噌が山になっている場所では、そのうちの1品を受け取ってほしいことなどを伝えました。あとで触れるように、青空市での支援物資渡しは整然と行われましたが、文庫本を読

みながら、開始時間がやってくるのをじっと待っていたこの青年の行動があったからこそ、整然とした列がつくられたように思います。

わずか15分で支援物資はなくなった

この日の青空市のために、私たちが会場に運び入れたものは、お米約300キロ、讃岐そば225袋、洗剤アタック130箱、台所洗剤ファミリーフレッシュ120本、ティッシュペーパー5個入り130セット、婦人服50着、スニーカー25足などです。いずれも上越市民のみなさんからお寄せいただいたものです。

開始5分前。西大通りの青空市の会場には支援物資受け取りを待つ人で長い列ができました。180人近い人たちになったのではないのでしょうか。道の両脇には「日本共産党災害救援隊」と書かれた2本の黄色いのぼりがたなびいています。私たち4人は、「被災者の生活基盤の回復を」「救援・復興に全力を」というゼッケンを付けて並び、挨拶しました。

私から、「中越沖地震では岩手県を含む全国から支援していただき、感謝しています。今回は私たちが被災されたみなさんに恩返しをする番です。私たちが持ってきました物資は、上越市民が少しでもみなさんのお役に立ちたいと心をこめて寄せてくださったものです。どうぞ受け取ってください」とのべると、列の中から拍手が起きました。上野議員は岩手県生まれ、岩手県育ち。私に続いてマイクを持った同議員は、「私の実家はいま釜石市にあります。この桜木町は父が岩手交通に勤めていた頃、一時期、お世話になった場所です。頑張ってください」と激励しました。意外な紹介にびっくりしたのでしょうか、どよめきという大げさになりますが、列のあちこちから驚きの声があがりました。

青空市をスタートさせてからは大忙しでした。上野議員はトイレットペーパー、ティッシュを渡すコーナーの担当、私は洗剤コーナーで品物を渡す係です。「アタックとファミリーフレッシュ、どちらか1個を選んでください」と一人

ひとりに声をかけて渡すと、「ありがとうございます」「助かります」という声が次々と返ってきました。物資を渡すのに夢中になっていましたので、私は時間が経つのを忘れていましたが、全部の支援物資を渡しきるまでに要した時間はわずか15分でした。物資が無くなるのは早いよと聞いていたものの、まさかこんなにも早く終わるとは驚きでした。

青空市は早々と終わりましたが、混乱はまったくありませんでした。物資渡しをした一人、Gさんの話では、私たちが事前にお願ひした「各コーナーでは1品だけ受け取ってほしい」というお願ひがしっかり伝わっておらず、一部の人が2品を受け取ろうとした場面もあったそうです。でも、その時、列の後ろにいた人たちから「1品ずつだよ」と注意する声が飛んだそうです。たいしたものです。

後片付けが終わってから、私たちは現地で応援してくれたFさんからも加わってもらい反省会をやりました。私たちは、上越市の日本共産党救援隊としては第1陣です。支援物資がさらに集まった時には、第2陣、第3陣が出かけることになっていきますので、教訓になることはしっかりと伝えることが求められていたのです。

反省会では、評価していい点として、「ほぼ時間通り始めたこと、ちゃんと一列になってもらったのがよかった」「始める前に、こちら側から短く挨拶したのもよかったと思う」「コーナーをもうけたので、多くの支援物資が平等にわたったのではないか」「衣料品は一点、一点並べたので、手にとって見てもらえた。その結果、全部わたった」などという声がありました。

一方、今後、工夫すべきこととして、「スニーカーの入った袋にはマジックでサイズを書いてあったが、もっと見やすいように袋の上の方に大きく書いておいた方がいい」「ボランティア活動をしていて、青空市に参加できない被災者や体が不自由で物資の受け取りにこれない人たちにどう渡すかも考えないといけない」「きょうは、コメだけでなく味噌を欲しがるといふ人が何人もいた。被災者の求めているものは何かしっかり調査して準備すべきではないか」などという声も出ました。

私たちが青空市を開催した大槌町桜木町は約400世帯。津波で家に住めなくなり、遠くへ避難している人もかなりいました。写真で見れば、何事もなかったように見える家がたくさんありますが、自宅に残っている人たちも海水、濁流の床上浸水などの被害に遭っていました。そして、多くの人たちが泥だし、掃除、買い物などで様々な困難を抱えていたのです。支援物資を渡すということだけでしたが、私たちの活動がこうした人たちのために少しでもお役に立てたことがわかって、うれしく思いました。

古老の話を聞いて津波対策をすすめたまち

国道45号線を北上した時も南下した時、出合うたびに車中で話題になったのは「津波浸水想定区域」という案内標識です。道路が低い方向に向かっている時には、「これより先」という言葉が付き、高い方向に向かう時には、「ここまで」という言葉が付いています。国道45号線は高くなったり、低くなったりの繰り返しの道路ですので、この標識とはあちこちで出合いました。

今回、私たちが視察した三陸海岸は、まだ津波が押し寄せてきたあとがしっかり残っています。ですから、その標識通りになっているかどうか、私たちは関心を持ちました。驚いたことに、標識のほとんどは今回の大津波が押し寄せた高さより高いところまで津波が行ったのはわずか2か所でした。

青空市を行った日の午後、私たちは釜石市平田在住のNさんから今回の体験やこれまでの津波対策について聞くことができました。Nさんは77歳。元教員で、震災対策についてはとても詳しい方でした。大地震の直後、Nさんが家に帰ろうとした時、海が膨らんでいるように見えたといいます。それで、すぐに高台に逃げたそうですが、4メートルの防潮堤を乗り越えて津波がNさんの町内を襲いました。そのとき、一番早く津波に呑みこまれていった民家は何とNさんの家でした。

Nさんによると、津波に関しては、2つの大切なことを子どものころから教わってきたといいます。ひとつは、津波と競争するなということ、津波を見たら横に逃げろ、ということでした。いまひとつは、親でも子でも助けようと思ふな、一人で逃げろということです。教えたのは古老です。

私たちが車中で話題にした「津波浸水想定区域」という案内標識をどこに設置するかについても、過去の経験を古老から聞いて設置したものであることを教えていただきました。津波については、古老の話をしっかりと聞いて対策をとることが重要なことのひとつだということです。

Nさんはまた、これまでの津波の経験から得た教訓として興味深いことを語ってくださいました。この教訓も2つです。ひとつは、人間は自然に勝とうとしてはならない。もうひとつは、自然のエネルギーが及ぶ最大値を想定し、その影響が及ばないところまで引き下がって生活すること。そして、この教訓を学ぶために釜石市の唐丹という地域の被災現場を視察するように言われました。

岩手訪問の3日目、私たちは国道を南下し、唐丹地域を初めて訪れました。この地域の海寄りの道路の隅に石碑があります。「海嘯遭難記念之碑」と書いてありました。海嘯（かいしょう）というのは河口に入る潮波が垂直壁となって川を逆流する現象で、潮津波（しおつなみ）とも呼ばれているそうです。

この石碑に彫られた文面はほとんど読めなくなっていますが、Nさんによると、この石碑は明治29年の大津波で犠牲者を出した地域の人たちが、犠牲者の慰霊をするとともに後世に生きる者に対して、「ここよりも低いところに家をつくって住むな」と警鐘の意味も込めてつくったものだということでした。

現地ではしっかりと確認できたのですが、この石碑よりも低いところに造られた家々はことごとく流失していました。石碑とほぼ同じ高さのところ、それ以上のところは今回の大津波でも無事だったのです。唐丹湾には大きな防潮堤も造られていましたが、津波はこれを乗り越え、石碑が指摘した通り、石碑よりも低い地域の民家を襲ったのです。まさに、人間は自然に勝とうとしてはならなかったのです。



被災地党員の頑張りに感動

私たちが大槌町で青空市を開催するにあたっては、地元党支部の協力が不可欠でした。大槌支部の支部長さんは宇都宮洋治さん、76歳です。最初、ご自宅を訪ねました。住宅街の山際に宇都宮さんの住宅がありましたが、本人は留守、大工さんたちが1階の床の修繕工事をしている最中でした。



じつは宇都宮さんの住宅も床上浸水し、宇都宮さんは避難所暮らしだったのです。

初めて宇都宮さんにお会いしたところは、避難所となっている桜木町保健福祉会館でした。保健福祉会館は避難所兼ボランティアセンターとなっているのですが、宇都宮さんは地域の人たちと一緒に被災者支援の活動をされていました。宇都宮さんは背が高く、体のがっしりしている人で、こう言うと失礼かも知れませんが、動きが若々しいのには驚きました。

大槌支部の人たちの9割は津波で家を流され、いまも5人の仲間の行方はわ

からないといえます。宇都宮さんは、大津波がやってきた後、党支部長として仲間の安否確認に奔走しました。いまは何よりも、支部の仲間が集まれる場所をつくりたいと語ります。私たちが見たご自宅の床工事はそのための工事だったのです。

岩手を訪問した2日目の夜、私たちは釜石市の党議員団（2人）のみなさんと懇談する機会を持ちました。びっくりしたのは、私たちと懇談している際にも、次々と市民から電話がかかってきたことでした。「家の修繕工事ができるよう手助けをしてほしい」などの相談の電話があるたびに、私たちとの懇談は中断しました。釜石市の党議員団が市民から頼りにされていることがよくわかりました。

大地震が発生した時、釜石市議会は開会中で、菊池孝議員団長が質問している最中でした。三陸海岸沿いの市町村議員は何人も命を落としています。釜石市議会議員は議会中だったおかげで全員無事、大津波は市役所の屋上で見ていたといえます。

党議員団はこれまで毎日、市役所の対策本部を訪ね、情報収集に努め、集めた情報は町内会などに伝えてきました。また、毎日のように被災者のところをまわっているということでした。被災地にあって、常に被災者に心を寄せて頑張る姿には頭が下がりました。

この29日には釜石市議会が開催されるといいます。「市長が減災を目的にすすめようとしている湾口防波堤が果たして本当に必要なかどうか」「いまの時点で市政はもっと市民生活を守る施策にシフトすべきではないか」と菊池議員団長は熱く語ります。どんな論戦になるのか、傍聴してみたくなりました。

党の仲間の安否に気を使い、一時も早くまちを復興させたいとボランティア活動をしている宇都宮支部長、毎日のように市役所の対策本部を訪ね、次々と寄せられる生活相談で奔走する2人の党議員、私はこの人たちの活動を見て、「住民のいのちを守る活動のあるところに日本共産党あり」と思いました。東日本大震災の被災地の党員の皆さんの活動に学んで、私も頑張ります。